

亡命後のエーリヒ・フロムとパウル・ティリヒ —「民主的なドイツのための協議会」をめぐって—

深井 智朗 *

Erich Fromm and Paul Tillich in Exile: On the Council for a Democratic Germany

FUKAI Tomoaki

Although it has been well known that Erich Fromm and Paul Tillich were close in Frankfurt as colleagues and in the United States as political refugees, the sources and letters that illuminate their relationship have been few. However, recently discovered letters and sources demonstrate that they continued to form a close relationship through “the Council for a Democratic Germany” and also in private study groups in the United States. By analyzing these letters, this paper clarifies the intellectual exchanges of these two men in their period of exile.

キーワード： 民主的なドイツのための協議会、パウル・ティリヒ、エーリヒ・フロム

Keywords： The Council for a Democratic Germany, Paul Tillich, Erich Fromm

* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

第1部 エーリヒ・フロムとパウル・ティリヒの友情における「政治的なもの」

フロムとティリヒ

ヴァイマル期ドイツのフランクフルトで親しくなり、共に1930年代初頭にアメリカに亡命したエーリヒ・フロム（1900-1980年）とパウル・ティリヒ（1886-1965年）との関係についての研究はこれまで皆無ではないが¹、十分になされてきたとは言えない。特に亡命後の両者の知的交流についての資料は少ないし、研究も多くはない。フロムの知的伝記を書いたゲルハルト・ペーター・ナップは亡命後のフロムが、ワシントンのいわゆる「一宮クラブ」で、ハリー・スタック・サリヴァン、クララ・マベル・トンプソン、ウィリアム・シルヴァーバーグ、エドワード・シプリー、ジョン・ダラード、マーガレット・ミードなどと、禁酒法時代にアルコールを飲みながらにぎやかな学問談義を続けていた様子を伝えているが、この会でティリヒと再会したことも報告している。そして両者の関係については次のようなものであったとしている。フロムは「パウル・ティリヒとも旧友を温めることになった。ティリヒは、著名な哲学者、神学者であり、その頃既にニューヨークのユニオン神学校で教えていた。現代の心理学と社会学を基盤に再構築された彼のプロテスタンティズム論はフロムに訴えかけるメッセージを秘めていたが、両者は親しい関係になることはなかった。預言者同士は、往々にして相手の領域には踏み込んで行けないものなのである」²。しかし両者はナップの報告にもかかわらず、フランクフルト時代と同じように「親しい関係」を亡命先でも持ち続けていた。そのことは既に他の論考で明らかにした通りである³。もっとも両者の交流についてのさまざまな証言にもかかわらず、両者の「親しい」、「積極的」な関係を示す資料証拠はほとんど残されていない。確かに両者がお互いの思想について良く知っており、それをそれぞれの著作の中である時は名指しで、またある時は名前をあげないで利用して

いることは明らかである。また両者はそれぞれの著作の書評なども積極的に引き受けている。しかしそれをもって積極的な関係ということはできない。

両者の積極的な協力関係を具体的な資料として確認し得る可能性があるのは、フロムが1951年にメキシコの国立自治大学医学部に精神分析医養成のコースが設置される際に、定員外教授として招かれた際のティリヒの協力であろう。フロムは1956年までこの地位にあったが、その間にティリヒはその仕事に協力するためにメキシコを訪問している。フロムはこの教育的な仕事を「何もかも自分でやってしまわないように……ニューヨークから時折応援を得た」のであるが、その一人が「フランクフルト時代からの知人であった神学者のパウル・ティリヒであった」⁴。しかしメキシコ時代の両者の交流についての研究は今日までほとんど手付かずの状態である⁵。

もうひとつ両者の接点が具体的な資料として確認できる可能性があるのは、ドイツからの亡命知識人たちによる「民主的なドイツのための協議会」設立過程でフロムとティリヒの間で交わされた種々の対話である。これについてはティリヒも日記的なメモの中でしばしば言及しており、第三者による証言も残されている。しかし両者の間で交わされたはずの具体的な文書資料、あるいは証拠がこれまで何も発見されていなかった。ところが今回それを確認した。これまで両者の間で交わされた書簡は4通しか発見されていないが⁶、今回の調査で新たに一通発見した。それがこの委員会に関する書簡であった。それはハーヴァード大学の「ティリヒ文書」の中に残されていた。通常の手紙に整理分類されたファイルではなく、「民主的なドイツのための協議会」⁷のファイルに分類されていたので今まで見過ごされてきたのであろう。

本論では、この書簡を手がかりに亡命後のフロムとティリヒの知的交流関係の一部を解明したい。まず第1部では、この書簡が書かれた背景を明らかにするために、「民主的なドイツの

ための協議会」設立のプロセス、またこの協議会における両者の役割、またこの時代、すなわちドイツの敗戦直前の両者の関係について考察してみたい。また第2部に今回の調査で収集し、整理、編集した書簡と資料の翻訳を収録する。

「民主的なドイツのための協議会」

「民主的なドイツのための協議会」とはどのような団体であったのか。またどのように成立したのか。まずはその問いに時系列に答えることにしたい⁸。

作家のトーマス・マンは1943年8月11日の日記で「ヨーロッパの将来についてのティリヒの案文を読む」⁹と書いている。その案文がどのような内容であったかは日記の記述からは明らかに出来ないが、おそらく日付から考えるならば、ティリヒが前年公開した戦後ドイツの再建についての命題集、「戦争後の再建についての精神的な問題」¹⁰である可能性が高い。

また1943年8月17日のマンの日記に「ティリヒ宛の手紙を書き始める」¹¹とあるが、これは今日まで返信も含めて未発見のままである。これは時期的に見て、「自由ドイツ」運動の趣意書に関する意見と思われる。この「自由ドイツ」運動とは、ソ連邦内のドイツ人亡命者たちが「自由ドイツ国民委員会」を設立したのを契機に、アメリカでも「自由ドイツ」運動を開始しようと、アメリカに亡命したドイツ人たちによって設立されたものであった。彼らは政治的な立場、また認識においては異なっていたが、戦後ドイツの再建とナチズムへの批判と犠牲者としての自己意識という点では共通していた。彼らはナチズムの破壊的、残虐的な行為の故に戦後ドイツの再建が報復や悪意によってなされることを懸念し、ヨーロッパの平和とドイツの民主主義的な再建に最初からナチズムの徹底的な批判者であり、犠牲者であった亡命者が参加すべきだと確信していた。そのような団体を結成するための準備で、一度は組織化に失敗したのであるが、後に「民主的なドイツのための協議会」となって生まれ変わって活動を開始した。

さて、まずはこの「自由ドイツ」運動であるが、その始まりについて1943年8月1日のベルトルト・ブレヒトの日記に次のように書かれている。「夜フィアテルのところに次の人々が集まった。〔トーマス・〕マン、〔ハインリヒ・〕マン、フォイヒトヴァンガー、ブルーノ・フランク、L・マルクーゼ、H・ライヒェンバッハ、それに僕。4時間の話し合いで次のような案が起草された。」¹² その内容というのは「連合国の勝利が目前に迫った今この時、下記のドイツ出身の作家、学者、芸術家は、以下の宣言を公式に発表することを自らの義務と見なすものである。われわれは、ソ同盟において、ドイツ捕虜およびドイツ亡命者が、ドイツ国民に、抑圧者を無条件降伏に追い込み、ドイツに強力な民主主義をかちとろうとアピールした宣言文を歓迎する。われわれも、ヒトラー政権およびヒトラーに癒着した層と、ドイツの民衆という二つを峻別する必要性を痛感する。われわれは、ドイツに強力な民主主義が生まれぬ限り永続的な世界平和は生まれないと確信するものである。」¹³ ブレヒトはこの文章の最初のセンテンスはマンが書いたものであること、またマンは「癒着した層」という言葉よりは「共犯者」という言葉を使った方がよいと述べたことなどを記録しているが、さらに参加者がこの文章に賛同した後、「Th〔すなわちトーマス・マン〕は、満足そうに、階下にいるご婦人たちの前でそれを朗読した」¹⁴とも書いている。

ところがブレヒトはその翌日、8月1日の日記に次のように書いている。「今朝Th・マンがフォイヒトヴァンガーに電話してきた。自分の署名は撤回したい、わたしは〈二日酔い〉だったから。あれは〈愛国的な宣言〉であって、あんなことをすれば連合国の〈足をひっぱることに〉なる、わたしは〈連合国がドイツを10年か20年調教してくれても〉それを不当とは思わない、こう言ったそうだ。」¹⁵

結局マンはこの運動に参加することはなかった。他方でティリヒは8月1日の会合には出席していなかったが、その趣意書を送られ、最終

的にはこの運動が別の可能性を模索し、組織化された時に議長に就任している。ティリヒとの主たる連絡役になったのはプレヒトであった。マンとプレヒトの間には、この問題のみならず、既に1920年代から政治的な見解や文学上の諸問題で関係に亀裂があり、マンの煮え切らない態度を好ましくないと思っていたプレヒトのマンに対する否定的な見解をティリヒが鵜呑みにしないように、ティリヒには予め自分の見解と立場とを説明しようマンが書き記したのが、おそらく8月17日のマンの日記に言及された書簡であろう。

ティリヒの方は前年に『アウフバウ』誌を舞台にしたいわゆる「ドイツ論争」、「ルードヴィッヒ論争」で、ハンナ・アーレントなどと共に来るべき戦後ドイツのあり方について論争したばかりであり¹⁶、この運動に協力する義務を感じていた。そこでティリヒはこの運動を改めて仕切り直し、アメリカ側の協力者も得て、政治的な立場を超えて広く亡命者たちを終結するための協議会を構想することになった。それが「民主的ドイツのための委員会」であった。

この委員会の議長就任を引き受けたティリヒは、今度は逆に1943年11月4日に改めてマンにこの会に協力してくれるように申し出ている。その日ティリヒは社会主義者のパウル・ハーゲンと一緒にマンに会った。マンはこの会の趣旨について今一度ティリヒから話を聞き、これまでの経過をマンの側からも説明し、自らの懸念についても伝え、亡命者たちの代表委員会の設立という案についてワシントンに打診してみたいという返事をした。

マンはすぐさま当時の国務省次官補アドルフ・バーリに手紙を書き、この件について問い合わせた。その中でマンは自らがこの会に参加し、責任を果たすとすれば、それはこの会がアメリカ政府によって承認されるもの、少なくとも否定的な判断を下されるようなものではないということが最低条件になると述べ、さらに11月27日に西海岸に用事があって出かけるので、その前後に直接話をしたいと申し出た。そ

して両者は実際に11月25日に会い、その際バーリはマンに、問題がはっきりするまでドイツに関する論争や対立の場から遠ざかっているように勧め、さらに外国に在住するドイツ人の中でも著名なマンの名前がどのように利用されるか注意深くあらねばならないと忠告した。バーリはあれかこれかの返答をしたわけではないが、マンはそれを政治的な返答と理解し、その日の日記にはバーリからは「運よく否定的な返答」と書き、この協議会にはバーリの否定的な意見などもあり、参加しないことを決意したと関係者に伝えた¹⁷。

ティリヒはクラウス・ハープレヒトの伝えるところによれば、マンの決定は「ドイツに対する死刑判決だ」¹⁸と述べたという。さらにティリヒは、もう一度だけマンを説得するように今度はラインホルド・ニーバーに依頼したが、それも無駄なことであった。

他方でプレヒトはティリヒを議長にすることで計画を立て直して再出発することに意欲的であった。プレヒトは大変な情熱を傾けてこの委員会設立のために働いた。その後どうしてもやはりマンを、さまざまな見解の違いや個人的な複雑な感情にもかかわらず、この協議会に引き込もうと1943年12月1日に手紙を書いている。「ご存じのとおり私には、ヒトラーに反対して亡命したドイツ人たちの団結へ向けての試行が、たいへん気にかかっています。実際、共和国の大きな労働者諸政党の相互間の不和こそが、ヒトラーに権力を奪取させた主因でした。団結のためにあなたがいかばかりかの寄与をなするか、承知している私としては、あなたの強い疑念、一方でのヒトラー政権とその取り巻き、他方でのドイツの民主勢力の間に烈しい対立があることへの疑念が、あの会合のあと私が話し合ったすべてのひとびとに、驚きとつらい気持ちとを呼びさましていることを、あなたにお伝えせずにはいられません。」¹⁹「尊敬するマン様、あなたは私たちの誰よりもアメリカ人から傾聴されるひとりですが、そのあなたが、ドイツ国内に言うにたりる民主勢力の存在するこ

とを疑っておられることは、私たちの友人のすべてをほんとうに心配させています。なぜならドイツのみならずヨーロッパの未来は、この勢力を助けて勝利させるか否かにかかっているでしょから。私がこの手紙を書くのは、あらゆる問題のうちでもっとも重要なこの問題であなたが態度を決めて、私たちの友人たちを安心させてくださることが、きわめて重要なことであると、心から確信するからです。」²⁰

しかし結局マンはこの協議会に参加せず、むしろ次第に強い調子でこの委員会を批判するようになった。1943年11月19日のマンの日記には「エーリカとすでに朝もそうであったが、ドイツについて、協議会問題について、ティリヒの構想について、批判的」²¹とある。

それゆえに当初の委員会設立メンバーたちは、この協議会の成功のために一方で奮闘し、他方で、彼らの多くは、マンのこのような態度に失望した。たとえばオットー・ツォフはティリヒの友人であり、またティリヒの著作の積極的な読者のひとりであるが、マンのこの度の決断について1943年12月14日の日記で次のように批判している。「結局彼は、ワシントンの政府がその決断で機嫌を損ねてしまうのではないかと心配しているのだ。そして何と彼はこの件から身を引いたのである。私たちの間に非常な幻滅感が支配しただけではなく、人々はどうしようもなく立腹していた。トーマスは常にあらゆる機会をとらえて政治的な発言をし、反ナチのための戦いの政治的リーダーとして登場しているのである。しかし彼は言葉以上のことが問題になると、いつも逃げ腰になるのだ。しかし問題は皆がドイツの代表だと思えるような人物が他にいるだろうか。もしそうであるならあきらめがつくのであるが、そういう人がいないのである。私たちの中にはベネシュやド・ゴールがいないのだ。それで最終的にはパウル・ティリヒが選ばれたのだが、それほどの感激があったわけではない。」²²

ティリヒはこの時自らがこの責任を負うべきなのか、あるいはそうすべきではないのか悩み、

「政治的な判断だけではなく、個人的な重荷についてもフロムに助言を求め」²³た。おそらくティリヒはフロムのプラクシスを訪ねたのであろうが、この時のフロムのアドバイスはティリヒによれば、「フランクフルトでの仮面パーティーで私たちが実践したヘーゲルの命題、現実弁証法 テーゼとアンチ・テーゼを通してジン・テーゼへ」²⁴であったという。すなわち、状況の両義性に耐えて職務を遂行せよ、ということであった。

「民主的なドイツのための協議会」設立宣言文をめぐる

トーマス・マンは1944年年4月1日の日記にはやはりこの協議会について「お茶にマルク教授。ティリヒ協議会とドイツ問題とについて対話」と書いている。これが両者の間でのこの協議会をめぐるの最終的な意見交換で、結局マンは、ティリヒの合衆国における政治的行動、具体的には戦後ドイツがどのようにあるべきなのか、という問題についての見解についてはまったくそれを受け入れることができなかった。1944年4月17日の日記にはそれを「ドイツ人亡命者たちのとんでもない振る舞い」²⁵と呼び、ティリヒを代表とするこの委員会の構想を批判している。

それでもティリヒとブレヒトは新しい協議会の形成のための努力を続けていた。ブレヒトがハインリヒ・マンに1944年3月13日に送った手紙には次のように書かれている。「民主的なドイツのための協議会の設立準備委員会の委託を受けて、お便りします。この委員会のメンバーはティリヒ、ベアヴァルト（カトリック神学の教授、中央党）、リップス、ブジフラフスキー、クシュジンスキー、ヘルツ、ハーゲン、バーンハイム、ヴェルヒャー、グラウザー、マリーア・ユハーチ（社会民主党）、ペーレンシュプルング、ヒルシュフェルトで、したがってすべての旧労働者諸政党と、中央党と、宗教社会主義者とを代表しています。わたしたちはあなたに、常任委員会に加わってくださるよう

に、お願いします。私の考えでは、亡命中のドイツ民主主義勢力を結集しようとするこの試みは、真剣なものです。国務省の態度は、当初は——トーマス・マン氏からお聞きになっているでしょうが——かなり冷淡だったものの、いまではまったく友好的になっています。……ティリヒ、カントローヴィッチ、プジスラフスキー、ならびにリップスから、個人的な挨拶をこづかっています。」²⁶

またブレヒトからマンへの1944年4月（日にちは不明）付けの手紙から、準備の進捗状況がわかる。「ティリヒへ。私が委託を受けて連絡をとったひとたちは、残らず強い関心を示しています。ただこちらでも事はあまり早くは捗りません、……これまでに承諾したのは、ハインリヒ・マン、フリッツ・コルトナー、リオン・フォイヒトヴィンガー、エリーザベト・ブルグナー、パウル・ツィンナー、レーオポルト・イエースナー教授、ベルントルト・フィルテルです。デーブリン、ホルクハイマー、F・ラングは、もっと話し合いたいと言っています。ライヒェンバッハは、彼の大学当局と相談する必要があるようですが、彼自身はまったく賛同していません。彼は近日中に講演旅行に出るついでに、アインシュタインそのほかと話し合うつもりです。……どうかあなたは、ニューヨークでいらだたないでいてください。こちらでの関心がこの程度と見えるとしても、しかしここではいわばひとりが小委員会であって、それぞれにまず問題を明瞭にしてから集会を開いているわけなのです。……プロテスタント・サークルはきわめて重要でもあり、急いで設立する必要があると、私も承知しています。……」²⁷

ティリヒもこのような状況の中で彼の旧友たちに宣言文の草案を送り、協力を求め、支持をとりつけようとしていた。そのひとりが精神分析医であり、彼のフランクフルト以来の友人であるエーリヒ・フロムへの書簡であった。それは現在に至るまで発見されていない。しかしフロムはそれを受け取るとすぐにティリヒに宛てた返事を書いた。それが今回確認した書簡であ

る。

フロムはこの草案の内容について、自分は「一致した見解をもっている」ことを明らかにし、さらに「大いなる関心と喜びをもって」この草案（書簡では論説）を読んだことについても記している。しかし同時にフロムは、自分は「これまで何らかの政治的グループに所属したことがない」こと、また「このグループの目的とすることがはっきりと見いだせず」、「組織体についても不明瞭なまま」なので、趣旨には賛成だが、このグループのアクティブなメンバーになることはできないとも述べている²⁸。

しかしそれは単純な拒絶ではないことは、書簡の最後の言葉からも明らかである。「私は、あなたとわたしができるだけ早く一度、この論説で触れている問題について議論する機会が与えられることを希望しています。」この「機会」がいつであったのか。あるいは実際に二人がこの問題で議論したのかは分からない。フロムは強くこの運動を支持したわけではないが、否定はしなかった。それはあのプラクシスで語られたことと同じ内容であった。両義性をもって現実に対応せよ、という提言である。

マンを抜きに発足した「民主的なドイツのための協議会」の運営ははじめてから困難な舵取りをティリヒに要求した。ティリヒはこの協議会の準備委員会の議長として最初の宣言文を起草したが、それにまず反対意見を述べたのがアルベルト・グレジンスキーであった。彼はかつてプロイセンの内務大臣でもあった社会主義者で亡命者からも一目置かれている存在であった。グレジンスキーは実は既に1941年に「自由ドイツ人協会」(Association of Free Germans)を立ち上げたが、それは周囲の協力を得ることができずに失敗に終わっていた。グレジンスキーはまるでその時の仕返しをするかのように冷淡な態度でこの協議会への参加を拒否することをティリヒに伝えてきた。しかし他方では1944年4月27日付けで、ラインホルド・ニーバー、ウィリアム・ジョイ・シーフリン・ジュニア、ドロシー・トムソンの連名で、この協議会を支

持する要請が亡命者たちに送られた。

ティリヒは『民主的なドイツのための協議会会報』の第1号にこの協議会のための「宣言文」を掲載し、また5月3日にはプレス・リリースを行い協議会のアクション・プランを提示した。

ところでその後ティリヒはこの会に加入するこのなかったフロムと疎遠になったり、仲たがいはなかった。そのことはフロムが所蔵していたパウル・ティリヒからの1942年3月5日付の連絡書簡からも明らかである。「お知らせ/コロンビア[大学]・ユニオン[神学校]哲学グループの皆様/次回の会合は、3月11日水曜日午後**[判読できない]時から、クレアモント通り99番地のティリヒ教授のアパートで開催されます。J・ランドール教授が「宗教的状况の形而上学的癒し」というペーパーを朗読してください」²⁹。

出席できない方は、どうぞ[ハンナ・]ティリヒ夫人までお知らせください。/パウル・ティリヒ/1942年3月5日」²⁹。

両者は民主的なドイツのための協議会で協力し合うことはなかったが、その後も交流を続け、お互いの仕事に対して刺激を与え続けた。そして既に述べた通りフロムはメキシコ時代にティリヒに具体的な助けを求めていたのである。

敗戦前後のティリヒとフロム

それではこの時代両者はどのような関係にあったのか。両者の交流の中で、この「民主的なドイツのための協議会」はどのような意味をもっていたのか。この新しく発見された書簡は両者の関係について私たちに何を教えてくれているのであろうか³⁰。

この時代、両者の関係は、従来のさまざまな推測や予想に反して、大変親密なものであり、両者はお互いを必要としていた。両者はお互いに専門分野も違い、宗教についての考えも異なっていたのであるが、両者は何を問題にしてきたのか。晩年には自らを「無神論の神秘主義者」³¹と称している通り、ラビの家系に生まれ、

ユダヤ教徒としての教育を受け、その伝統的価値に生涯親しんでいたにも関わらず、フロムは神への信仰を持たない無神論者であった。また「一生を通じて、フロムはレッテルを貼られることを頑なに拒んだ。彼が専門家集団や政治団体と密接な関わりあいをもつことはまれだったし、持ったとしてもたいていは短期のものだった」³²とあるように、彼の人生を概観しても長く親交をもったグループや個人は少ない。そのような中で、知的活動を行ったほぼ全時期において公私にわたった付き合いを持ったのが神学者ティリヒであった。

ダニエル・バーストンは「そもそも思想家の仕事年代別に区分することは誤解を招く恐れがあるが」と前置きした上で、フロムを同時代人の間で位置づけ、また彼の研究の文脈をたどる目的で、フロムの仕事の年代区分を行っている。バーストンによれば、文体と主題の変化とフロムの著作に対する読者の反応を基に、初期の仕事は「フロイト・マルクス主義期」(1929～1935年)、「宗教的・神学的主題への関心が高まる時期」(1936～1960年)を中期とし、最後の時期を「ある種のフロイト回帰と、フロイト理論の転調の試みから始まり、学問的価値からすればまったく不必要な繰り返しを行った時期」(1960～1980年)としている³³。フロムとティリヒの関係はドイツ時代、つまりフロムの初期の仕事から始まったと説明されているが、両者の関係がもっとも密であったのは、アメリカ時代からメキシコ時代、つまりフロムの仕事の中期であったと言ってよい。

民主的なドイツのための協議会の活動の時期は、両者にとっての亡命期からドイツの敗戦までの間、すなわちパートンの分類で言えば、「宗教的・神学的主題への関心が高まる時期」であるが、この時代の両者の交流を示すもうひとつの未公開の資料がある³⁴。それはニューヨーク・サイコロジー・グループの活動である。ティリヒ研究においてもフロムの研究においても今日に至るまでほとんど顧みられることのなかった研究会であるが、この研究会こそ両者の知的交

流の舞台であった。

フロムとティリヒが直接議論をしたニューヨーク・サイコロジ・グループは、神学と心理学の関係について議論をする目的で様々な分野の専門家が集まった研究会である。1941年から1945年の約4年間にわたり、合計29回のミーティングが開かれた。それはまさに「民主的なドイツのための協議会」の活動期間と重なっている。毎月1回、金曜の夜に、持ち回りというかたちでメンバーの自宅を会場にしていた。ミーティングの形式は一人がプレゼンテーションを行い、それについて議論を加えていくというものであった。メンバーはフロムとティリヒの他にロロ・メイ、スワード・ヒルトナー、デービッド・ロバーツ、ルース・ベネディクト、カール・ロジャースの他数名が参加していた。この会は当時、一線で活躍していたメンバーが参加していたにもかかわらず、その活動についてはあまり知られていないが、実は速記者によって議論がほぼ完全に記録されている。これまで出版されたことはなかったが、ハーバード大学の「ティリヒ文書」にそれは保存されている³⁵。またテリー・クーパーによって特にティリヒと、非公式ではあるがグループのリーダー的役割であったフロムに焦点をあてた部分が明らかにされている。以下は「ティリヒ文書」に基づいて紹介する。フロムとティリヒは、このグループの中心メンバーであり、しばしば二人の討議が白熱したためにミーティングを終えることが困難であることもあったという。

実際の議論の内容であるが、1年ごとにテーマを決める形で4つの主題を扱っている。1年目は「信仰の心理について」、2年目は「愛の心理について」、3年目は「良心と倫理の心理について」、4年目は「救済の心理について」であり、記録によれば特に1年目と2年目のテーマにおいてはティリヒとフロムが中心になり議論を進めている。

特にフロムは2年目のミーティングに一度も欠席することなく、他のメンバーの誰よりも様々な情報や議論の材料をグループに提供し

た。ティリヒもまた、フロムとは違った側面からコメントをしている。この年、フロムは『自由からの逃走』を出版したばかりで、この本の内容を反映したコメントを述べている。フロムにとって、権威主義者という単語が言葉の中でもっとも卑しむべきものであった。

特に権威主義者の特性についても議論されたが、ティリヒによれば、これはフロムの言う「人間の可能性」を明らかに超えたものであり、その究極の領域は必ずしも人間の攻撃性に関連しているわけではなく、人間はその特性に「属している」にも関わらず、それから遠ざけられているのだという。

また興味深いのは、「信仰の心理」について議論をするなかで、フロムはティリヒに対して「あなたの議論は神学的な言葉に忠実ではない」と指摘し、ティリヒに西洋の伝統と矛盾しない、神の「存在論」や神の「脱人格化」についてまとめるよう求めている。

2年目には、その年に刊行されたフロムの『愛するということ』をテキストにしてミーティングが進められた。議論のポイントは、人間から人間への愛と人間から神、神から人間への愛は同じか、人間と人間との間の愛は確認できるが、神から人間への愛は証明できず、果たして両者の愛は同じ性質のものと言えるかという点、「自己愛」という言葉の適否について、の2点であった。

自己愛については、それまでも議論されてきたが、にもかかわらず両者が生存中には解決できなかったテーマである。著書や書評など活字となった両者のやりとりに加え、このミーティングでの直接的な議論を考察することは、両者の意見の一致や、最後までお互いの主張を受け入れることができなかった相違点をより詳細に知る手がかりになる。

テキストとなった『愛するということ』の脚注で、フロムはティリヒの批判に以下のように答えている。「パウル・ティリヒは拙著『正気な社会』を書評した際に、『自己愛』などという曖昧な言葉を使うのはやめて、『自然な自己

肯定』とか『逆説的な自己受容』といった表現を用いたらどうかと提案した。この提案の趣旨はよくわかるが、次のような理由で賛成しかねる。『自己愛』という用語のほうが、自己愛に含まれる逆説的な要素がよくあらわれている。自分自身を含め、あらゆる対象に対する愛があり得るのだという事実をよく表している。また、ここで用いているような意味での『自己愛』という言葉には歴史があるということも忘れてはならない。『汝のごとく汝の隣人を愛せ』という聖書の命令は自己愛について語っている（以下略）。

さらにティリヒはこのミーティングにおいてもフロムの「自己愛」という言葉の使い方にさらに疑問を投げかけた。このテーマの議論が進むにつれグループでのフロムの存在感が増し、フロムは彼の最初のプレゼンテーションで、フロイト的なナルシズムとして自己愛を強く否定した。フロイトは、自己を愛するとナルシズムに陥り、自己を愛すると他者を愛する愛は残らないとしているからである。つまり自己愛が増えると他者への愛が減るというように、両者は互いに排他的であるという理論である。フロムは逆に、自己を愛することは、他者を愛する前提となるものであることを強調し、自己愛を利己愛（利己主義）と混同することから自己愛の誤った解釈が生ずると説明している。

これに対しティリヒは、フロイトとは違い、自己を愛すると他者を愛することができないという点についてはさほど憂慮しておらず、端的に「自己を愛することは不可能である」と考えている。また自己愛を比喩的に使う場合、自己愛よりも自己肯定や自己受容という言葉を使うほうがよいと主張している。その理由のひとつに、愛は常に忘我または自己超越を伴う性質を持っているが、自己愛はこのような超越をもたらさないことをあげている。

フロムの愛についての定義をティリヒは基本的に認めている。愛の定義における両者の互いへの影響を確認するのは困難であるが、フロムの「愛とは自分自身の分離と自分自身の統合を

保ったままの状態で、自分以外の誰かないし何かと結びつくこと」、そしてティリヒの「愛とは分離されたものを統一へと駆り立てる衝動である」という定義の間にそれほど大きな齟齬はない。しかし、愛が自己以外との結びつきであるとするならば、なぜ「自己（に対する）愛」と言うことができるのか、とティリヒは指摘し、フロムの愛と自己愛の定義の関係に理論的な矛盾があると批判している。

それではフロムの考える「自己愛」の対象とは何であろうか。『愛するということ』の中でフロムは、利己的な人間は実際には自分を愛せない、「真の自己」を愛していないと書き、「真の自己」を愛することを「自己愛」と定義している。では「真の自己」とは何であろうか。

従来の精神分析の理論では、リビドーのベクトルを「自己愛から対象愛」へと転換することによって社会性や道徳心を獲得し、自我を成長させることができると考えられていたが、フロムは明らかにこの点を否定し、自己も他者も同時に人間の愛の対象となりうると明言している。フロイト的に言うならば、ナルシズムに陶酔しきっている状態は他者へと愛のベクトルが向くことはなく、それは病理的な自己肥大を起こすような幼稚な精神状態である。しかしフロムはこのように解釈することで「自己愛を幼稚」「対象愛を成熟」と優劣をつけることはできず、自己愛の継続的な充足（フロムによるところの「真の自己」による健全な自己愛）は、人間の健全な発達や精神的安定に不可欠であると考えたのである。そして、この場合健全な自己愛とは、対象化した自己と、自我の統合によって育まるとされているというフロムの立場から考えると、彼の言う「自己愛」は、ティリヒの言う「自己受容」「自己肯定」が行われた先に獲得できるものと言うべきであろう。

このように見るとこの時代両者が「親しい関係」に至らなかったというのはまったくの誤解であり、事実と反することである。むしろ両者の学問上の協力関係、相互影響力はドイツのフランクフルト時代にまして、亡命後親密になっ

たというべきであろう。

それでは、この時代の両者の学問上の研究は、両者の政治的な活動、とりわけ今回確認された書簡に見られるような活動にどのような影響を与えたのであろうか。これはまさに「民主的なドイツのための協議会」についての二人の立場、あるいは相違を示しているのではないであらうか。自己愛についての両者の見解はこの政治的な生、あるいは政治的な出来事をめぐる共通の体験に基づく議論ではないのだろうか。フロムによれば「愛とは自分自身の分離と自分自身の統合を保ったままの状態、自分以外の誰かいない何かと結びつくこと」である。それ故にフロムはティリヒや他の亡命者たちとの連帯や、共通の状況認識にもかかわらず、「民主的なドイツのための協議会」への加入は拒否した。しかしそれはそれぞれの亡命者たちの人格やこれまでの交流の拒否や拒絶ではなく、自己喪失や自己放棄をせずに、その上で隣人愛を実践しようとするフロムにとっての原則的な行動であった。他方でティリヒにとっては「愛とは分離されたものを統一へと駆り立てる衝動」なのであり、この組織こそが彼にとっては愛の行動であった。それがフロムがティリヒへの3月21日の書簡の最後で示した、「できるだけ早く……議論」したかったことであったのではないか。

第2部 編集された書簡、及び関係資料

第2部で編集したのは、ティリヒがフロムにこの協議会への支持を依頼した書簡へのフロムからの返信（＝1）、依頼の書簡に同封されたティリヒによってまとめられた設立宣言文の草案（＝2）、今日なお未発見のティリヒがフロムに支持を依頼した書簡とほぼ同じ内容であったと予想されるゲルハルト・コルムへの書簡（あるいは送り状）（＝3）である。

1. エーリヒ・フロムからパウル・ティリヒへの書簡 1944年3月21日 ニューヨーク独文 手書き

エーリヒ・フロム

320 セントラル・パーク・ウエスト

ニューヨーク 25 ニューヨーク州[1]

1944年3月21日

ティリヒへ

「民主的なドイツのための協議会」の声明文をご送付くださりありがとうございます[2]。私は多くの点で、この声明文と一致した見解をもっています。しかし他方でひとは〔この声明文について〕さまざまに論じることになるでしょう。私はあなたの提案に基づいて、あなたのグループに私が同調し、参加することについて検討してみました。〔まず〕私はこれまで何らかの政治的グループに所属したことはありません。また、私のこのような***[3]との関係を変更するには、このグループの目的とすることがはっきりと見いだせねばなりません、〔さらにこの度はそれだけではなく〕組織体についても不明瞭なままです。

私は大いなる関心と喜びをもって、あなたの論説を読みました。私は、あなたと私ができるだけ早く一度、この論説で触れている問題について議論する機会が与えられることを希望しています。

敬具

エーリヒ・フロム

[1]印刷されたレターヘッド

[2]本稿第2部2として翻訳された文章

[3]判読できない

2. 1944年 3月 17日付で発送された「民主的なドイツのための協議会」の設立への参加を求める書簡に付された「宣言文」の草稿[1]

〔これまでの〕戦争の軍事的、政治的経過から明らかになってきたことは、ヨーロッパの再建（それはヒトラー＝ドイツを必ず、確実に敗北させねばならないがその後でのこととなる）は、西側の列強国とロシアとの協力によってだけなし遂げられるであろう、ということである。もし一方の側からだけの新秩序構築を試みるなら、それが東側からのものであれ、西側からのものであれ、ヨーロッパのみならず、他の世界にとっても同じように取り返しをつかないような、さまざまな紛争へとさらに導くことになるであろう。ヨーロッパの状況についてのこのような判断の一致が、[2a]ドイツからアメリカにやってきた国家社会主義に反対の立場をとる[2b]さまざまな職種、グループ、また〔さまざまな政治的〕方向性をもった人々の個性を、ヨーロッパ的な問題の解決という枠組みの中でドイツの将来という問題を取り扱うために、皆を繋ぎ合わせるのである。[3a]この宣言の全ての署名者たちはドイツ生まれであり、ごく初期から国家社会主義と戦ってきた人々である。これらの人々はドイツ以外の外国で、その国の市民になった人も、あるいはその道を選ばなかった人も、一人残らずこの経験によって、新しい政治的な地平を広げられた人たちである。[3b]

以下の宣言の署名者たちは、これがドイツ国民の正式な委託を受けてはいないということを知っている。しかし私たちはこう考えている。それにもかかわらず私たちはドイツと世界という領域で、新しいドイツを建設するための諸力や諸勢力を形成するために不可欠な存在になるであろう。それ故にこの署名者たちは、ドイツ国民が、ドイツの将来についての言葉を自ら語ることができない時があるなら、それを代わって語ることが義務であると感じているし、それは本質的にはアメリカ国民とその連合国の利害にかなっていると考えている。私たちは、この

ことを、私たちがアメリカ合衆国で保障されたのと同じように、しかし今度はまったく独自になそうと考えている。[4a]すべての署名者はごく初期から国家社会主義と戦ってきた。みなドイツではない国に留まることになり、市民権を得た者も、そうでない者も、政治的な思考において新しい、さらなる視野を開かれたのである。[4b]

I

ドイツの問題の解決はヨーロッパの問題の解決の一部分なのである。すべてのヨーロッパの国々の主権の回復と国家の安全についての正統的な要求は実現されねばならない。ヨーロッパの新しい形成とドイツの問題の解決のために着手することで、ヨーロッパの戦争が繰り返されることを不可能にする適切な処置が講じられることになるであろう。ドイツ国民は〔アドルフ・〕ヒトラーによって引き起こされたこの戦争の帰結を背負って行かねばならないが、その責任を逃れることはできない。それどころか、ドイツの問題が正しく解決されることなしには、ヨーロッパの問題の永続的な解決があり得ないことを誰も疑うことはないであろう。

いずれの解決のためにも必要となることは、国家社会主義を打ち倒し、その担い手を全滅させ、このような精神をドイツから、また他の国々から根絶することである。このことは、ヨーロッパの解放のための戦いが進行するなかで、国家社会主義者たちに対してドイツ人が立ち上がり、現存する戦争犯罪者の訴追を開始することで起こってくることである。しかしさらに、ドイツの帝国主義の担い手たちと、国家社会主義に権力を明け渡したことに責任があるグループが、その政治的、社会的、経済的な権力を掌握している構造を解体しなければならない。このことは特に、ドイツの運命に繰り返し禍をもたらした大土地所有者、大資本家、そして軍人階級の癒着に対してあてはまることである。もしドイツの国民が大土地所有を解体してしまい、大資本をコントロールのもとにおき、軍国主義

を追放し、このような集団と癒着していた公務員、裁判官、そして教師たちを徹底的に排除しようとする試みを成し遂げるとすれば、[5a]そして最終的にはこのような政治的実存の恒常的な危険性を取り除くことができるとするならば、[5b]そのことに外部から手出しをする必要はないであろう。

[6]武装解除されたドイツは、他のその他のヨーロッパの諸国民と共に[7]ヨーロッパの安全保障というシステムの枠組みの中で結び付けられるべきである。ドイツが、すべての占領した地域を返還し、引き起こした惨事への謝罪は、ドイツの力の限界に至るまでなされなければならないという要求は、自明のことである。しかし、ドイツの国民の大多数が、国家社会主義に服従させられたということ、彼らが第一のナチスへの抵抗者であったということ、また彼らはいつも非情な状況を置かれていたが、戦争は望まなかったということ、また、外からは確かなことは言えないのであるが、彼らがこのようなナチスへの抵抗が、ドイツ国内の残酷な締め付けを生み出し、より強力な軍事的組織を保持するようにしているということも忘れられるべきではない。ドイツ国内に住む大多数の人々を奴隷化したり、さらなる貧困へと導くような処置がとられるとするならば、それは正しい認識に基づくものとはいえない。さらに、『大西洋憲章』の原理的な事柄がそのひとつでも決定的な仕方では破棄されるなら、それはすべての事柄の破棄を意味するということをよく考えてみるべきである。

もしドイツが政治的に、また経済的に引き裂かれるようなことがあるならば、ヨーロッパの将来にとっても重大な取りかえしのつかないことになるであろう。それは汎ドイツ主義的な運動を再び生み出すような温床となるであろう。それはドイツが自らの将来を責任をもって形成するという可能性を消滅させてしまうであろうし、[8a]それによってこの課題を他の国に負わせることになってしまうことになり、[8b]これ

までの時代に見られなかったような大規模な国家社会主義的な民族統一運動を先鋭化させることになるだろうし、他の国民[9]はその貴重な力をこの民族統一運動の鎮静化のために使わねばならなくなるであろう。

II

ドイツの生産力が維持され続けることは、ヨーロッパ経済、さらには世界経済の将来にとって必要なことなのである。もしドイツの生産力が破壊されてしまうようなことがあれば、すべてのヨーロッパの国々の生産と消費は減少し、他の大陸とヨーロッパとの間の経済交流の大部分は失われることになるだろう。とりわけ、ドイツの何百万もの人が、失業状態が続くことになり、本人たちはそのようには望んだわけではないが他者に寄生することを強いられることになる。

ドイツの生産力は、ひとつの生産と消費のためのヨーロッパ的な[10]システムの中に位置づけられるべきである。このようなシステムを構築することによってヨーロッパの諸国民の経済的な協力が可能になるし、政治的な国境が持っている意味を減少させることになるであろう。[11a]ドイツが経済的な主導権を持つことと再軍備のリスクは、全ヨーロッパ的な計画とコントロールによってだけ取り除かれるであろう。[11b]ただこのような場合にだけ、ドイツは物的補償を最大限になし得るであろうし、その他のヨーロッパ〔の国々〕と共に、貧困化の危機から守られることになる。

III

国民によって同意され得るような民主主義がドイツで発展するためには、連合軍国側の軍部の代表者だけではなく文民統制者の代表者も、このようなデモクラシーの将来における担い手を、はじめてから見出しておく必要がある。国家社会主義の台頭に責任がある者たちは、もし彼らが最初は都合のよい存在であったとしても、すべて排除される必要がある。国家社会主

義に抵抗した者たち、すなわち、地下活動を行っている者たち、ゲシュタポに逮捕され監禁されている者たち、強制収容所に収監されている者たち、労働組合運動の活動家や構成員の労働者、教会や知識人たちで抵抗活動を担ってきた人々、都市でも田舎でも抵抗運動に加わってきた中流市民層に属する者たち、あるいはこのようなグループには所属していないがさまざまな活動を担ってきた人々は、みな用いられねばならない。これら人々によって将来のドイツの民主主義は担われるべきなのである。このような人々の協力を得て、独自の政府が設立されるための準備がなされるべきであり、ドイツ人の法的安定性と基本的権利の保証は即刻この政府の権力によって法制化されねばならない。人種差別に関する法の廃止は即時になされねばならないし、同じように信教の自由と学問の自由は回復されねばならない。出版、集会、結社の自由も再び確認されねばならない。労働運動の再建のためのプロセスを妨害してはならない。国家社会主義の指導のもとに制定された諸制度はすべて廃止されねばならないし、国家社会主義によって廃止された社会的、民主主義的な制度は新しく再建されねばならないであろう。

ドイツ国民が、大衆的な運動によって国家社会主義を崩壊させ、将来に、確かな民主主義の基盤を確立しようと試みるならば、連合国はそのような試みを歓迎すべきであるし、決してそれを妨げたり、阻止したりすべきではない。もしドイツ国民がこのような運動によって自ら国家社会主義から自由になれるのだとしたら、ただその時にだけドイツ国民は完全に自由になることができるのである。連合国の勝利というのは、ドイツ国民に対する国家社会主義の外的な力を破壊するものである。しかしただドイツ国民だけが、ドイツ国民を内的な破壊から解放することができるのである。——それ故に、ドイツ国民は平和を与えられるべきであり、ドイツ国民は負わねばならないあらゆる罪責にもかかわらず、平和を享受する正当な理由がある。ドイツが国民により、国民のための政府を発展さ

せ、それを堅持する内的、外的可能性がもたらされるべきである。

IV

デモクラシーについてのドイツ国民の教育は、人々の歴史的経験からのみ生み出され得る。このような展開がすでにはじまっていることの兆しが見出される。このような兆しは、国家社会主義に部分的にしか取り込まれなかった古い世代の中に見出される。またその兆しは、しばしば国家社会主義の精神に対して抵抗した若い世代に見出される。このような兆しは、国家社会主義を担い、今やこの思想のために悲惨な戦場で流血の経験をしている世代ではごくわずかしき見出されない。しかしこの世代であってもそこに抵抗がなかったわけではない。[12a] あらゆるこのようなことの始まりは国家社会主義の悲惨な結末と根絶という経験からはじめて生み出されることは確かである。[12b]

歴史的な出来事を通してのドイツ国民への教育と同時に、ドイツの若い世代は、このような出来事の意味を理解しているドイツ人によって教育されねばならない。外国人による教育は、心理学的にみても不可能であろう。しかしドイツとその他の国々との文化的な交流は早急に実現すべきであり、それは再び大規模に展開されるべきである。——大学、諸学校、教科書、公共の図書館、劇場、映画館などの精神生活にとっての重要な制度や施設については、とりわけ国家社会主義的な刻印の影響やそのような要因の全てはすみやかに取り除かれねばならない。[13a] それは内容それ自体と同様に、それを担ってきた個々人に対しても同じようになされねばならない。[13b] ドイツ国民に、彼らの精神的、文化的力を自由に発展させる可能性を与えねばならないのである。

社会的な状況について嘘を強いるような理念は、教育としてはまったく意味がないことを、特に強調しておかねばならない。民主主義の実現を試みようとするものがない民主主義的な教育理念というのは抵抗やシニシズムを生み出

す。ドイツ国民、そしてとりわけ若者に対する民主主義と諸国民の協力を生み出すような教育の諸前提というのは、あらゆるグループが、意味深い生活を送るための社会的確かさと可能性が保証されるような社会秩序の確立である。

〔この宣言の〕署名者は、〔戦後における〕ヨーロッパの形成という目標は、ドイツ国民を抑圧することによっては実現することはできず、新しくされた、民主主義的なドイツが内外からのリアクションの力から保護されることによってそこ確立され得ると確信している。〔14a〕このことは直接的には、敵意の中断ということによって始めなければならない。〔14b〕〔15a〕内的に確かなドイツの民主主義こそが、ヨーロッパと世界の平和に対するドイツの貢献である。〔15b〕

〔1〕Religion and Crisis 誌（Rと略す）と Bulletin of the Council for A Democratic Germany 誌（Bと略す）に掲載された文章とは別に、最終的にティリヒが原稿をまとめ、発表の前に関係者に送られた草稿のオリジナルは Paul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, Harvard Divinity School, Cambridge, Massachusetts, file 004, 1486, box 421 に保存されている。ここに翻訳したのは草稿のオリジナルである。草稿と R 及び B との差異が明らかになるように翻訳した。

〔2a〕-〔2b〕は手書きの挿入。

〔3a〕-〔3b〕は英訳された際（R）と（B）に挿入された文章。

〔4a〕-〔4b〕は（R）と（B）では〔3a〕-〔3b〕に移されている。ドイツ語版では同位置。

〔5a〕-〔5b〕は（R）と（B）では訳されなかった。

〔6〕この段落の前にドイツ語草案では改行されている。

〔7〕「ヨーロッパ的な」は（R）と（B）では「国際的な」。

〔8a〕-〔8b〕はドイツ語草案にはない。

〔9〕「他の国民」は（R）と（B）では「戦勝国」。

〔10〕「ヨーロッパ的な」は（R）と（B）では「国際的な」。

〔11a〕-〔11b〕は（R）と（B）ではこの段落の最後に移動されている。

〔12a〕-〔12b〕は（R）と（B）では削除された。

〔13a〕-〔13b〕は（R）と（B）では削除された。

〔14a〕-〔14b〕は（R）と（B）では「そのことは戦争が終

わったならすぐに開始されねばならないことである。』

〔15a〕-〔15b〕は（R）と（B）では「ドイツの民主主義が恒久的な仕方では確立されるならば、それによってドイツはヨーロッパと世界の平和に貢献することができるであろう。」

3. 1944 年 3 月 17 日にパウル・ティリヒがゲルハルト・コルム に「宣言」草案を送った際に添付された書簡 カarbon紙による写し〔1〕

ユニオン神学校

ニューヨーク 27

ブロードウェー 120 番街〔2〕

1944 年 3 月 17 日

ゲルハルト・コルムへ、

民主的なドイツのための協議会の設立準備委員会の委託を受け、お便りします。私たちの考えでは、これは、亡命中のドイツ民主主義勢力を結集しようとするための試みです。準備委員会のメンバーは、私の他に、ベアヴァルト、リップス、ブジフラフスキー、クシュジンスキー、ヘルツ、ハーゲン、ペーンハイム、ヴェルヒャー、グラザー、マリーア・ユハーチ、ペレンシュプルング、ヒルシュフェルトです。したがってこの委員会は、旧労働者諸政党と、中央党と、宗教社会主義者を代表していると言ってよいでしょう。私たちはあなたに、この協議会の常任委員会に加わってくださるようお願いいたします。そのためにこの協議会の準備委員会によって用意された設立の「宣言文」の草稿を同封しました。私たちはお返事いただけると確信しています。

敬具

パウル・ティリヒ

〔1〕この写しは、Paul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, Harvard Divinity School, Cambridge, Massachusetts, file 004, 1486, box 421

に保存されている。

[2] 印刷されたレターヘッド

注

- ¹ 竹瀬香織・深井智朗「……私たちが長い間会えないでいることを大変寂しく思っています——未見のエーリヒ・フロム＝パウル・ティリヒ往復書簡及び関連所管の解説と翻訳」『聖学院大学総合研究所紀要』49号（2011年）195－236頁。
- ² Gerhard Peter Knápp, *The Art of Living. Erich Fromm's Life and Works*, Peter Lang: New York, Berlin, u.w. 1989（滝沢正樹他訳『評伝 エーリッヒ・フロム』新評論）69頁（ただし一部訳文を変更して引用した。以下「ナッパ」と略す。）。
- ³ 深井智朗監修『ティリッヒとフランクフルト学派 亡命・神学・政治』（法政大学出版局）225～266頁。
- ⁴ Reiner Funk, Erich Fromm, 1983（これはRoRoRo叢書のErich Frommとほぼ同じであるが、そのオリジナル原稿の翻訳のようである。佐野哲郎・五郎訳『エーリヒ・フロム【人と思想】』紀伊国屋書店）178頁。
- ⁵ 例外的な研究は、Jorge Silva García, Erich Fromm in Mexiko: 1950-1973, in: *Jahrbuch der Internationalen Erich-Fromm-Gesellschaft. Wissenschaft vom Menschen*, Bd.3 (1993) Münster, S.11-25である。
- ⁶ 竹瀬・深井 前掲書 両者の書簡は今後さらに発見される可能性があるが、今日まで未発見のままである。
- ⁷ Paul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, Harvard Divinity School, Cambridge, Massachusetts, file 004, 1486, box 421.
- ⁸ 以下の事情についての詳細は拙論「二人の亡命知識人の運命」、及び「〈資料〉トーマス・マンとパウル・ティリヒの間で交わされた四つの書簡」『思想』第1073号53-80頁、また拙著『パウル・ティリヒ』（岩波書店）に基づいている。
- ⁹ Thomas Mann, *Tagebücher 1937-39*, hg. von Peter de Mendensohn, Frankfurt am Main: S. Fischer, 2008（『トーマス・マン日記 一九三七～一九三九』森川俊夫訳 紀伊国屋書店 2000年）361頁 以下『日記』と略す。
- ¹⁰ Paul Tillich, *Spiritual Problem of Postwar Reconstruction* のオリジナル原稿の復元と解説に

については拙論『戦後ヨーロッパの再建』を論じるパウル・ティリヒの未見の草稿について『金城学院学院大学 キリスト教文化研究所紀要』第17巻 2013年 41～64頁を参照のこと。

- ¹¹ 『日記』965頁。
- ¹² Bertolt Brecht, *Arbeitsjournal*, hg. von Werner Hecht, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1973（『プレヒト作業日誌3 1941～1947』岩淵達治訳 河出書房新社 1977年）67頁。
- ¹³ 同頁。
- ¹⁴ 同頁。
- ¹⁵ この点についてはKlaus Harpprecht, Thomas Mann. Eine Biographie, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1995（『トーマス・マン物語II 亡命時代のトーマス・マン』岡田浩平訳 三元社 2006年）556頁以下『物語』と略す。
- ¹⁶ この点についてはAlf Christophersen und Caludia Schulze, *Chronologie eines Eklats*. Hannah Arendt und Paul Tillich, in: *Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte*, Bd. 9, 2002, 98-130を参照のこと。
- ¹⁷ この点については注8の拙論を参照のこと。
- ¹⁸ 『物語』557頁。
- ¹⁹ Bertolt Brecht, *Briefe*, hg. und kommentiert von Günther Glaeser, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1981（『プレヒト全書簡』野村修訳 晶文社 1986年）407頁以下『プレヒト書簡』と略す。
- ²⁰ 同頁。
- ²¹ 『日記』1021頁。
- ²² 『日記』100頁。
- ²³ Paul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, Harvard Divinity School, Cambridge, Massachusetts, 1486, box 117.
- ²⁴ この点についてはPaul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, file004, 1486, box421を参照のこと。また、この暗号の解説については、Friedrich Wilhelm Graf, Februar 1932, *Party bei den Tillichs. Reale Dialektik in Frankfurt*, in: *Zeitschrift für Ideengeschichte* IX/4 (2015) S.111-120を参照のこと。
- ²⁵ 『日記』111頁。
- ²⁶ 『プレヒト書簡』407頁。
- ²⁷ 『プレヒト書簡』408頁。
- ²⁸ 本編第2部1を参照のこと。
- ²⁹ この書簡については深井智朗監修『ティリッヒとフランクフルト学派 亡命・神学・政治』（法政大学出版局）255頁を参照のこと。

³⁰ 以下のティリヒとフロムの関係についての記述は注1の拙論に基づいている。

³¹ ナップ 16 頁。

³² Daniel Burston, *The Legacy of Erich Fromm*, 1991 Cambridge (ダニエル・バーストン『フロムの遺産』佐野哲郎訳 紀伊国屋書店 1996年 54頁以下)。

³³ 同上 20 頁。

³⁴ これについては Terry Cooper, Paul Tillich and the New York Psychology Group 1941-45, in: *Bulletin of the North American Paul Tillich Society*, Vol. 31, No.2, Spring, 2005 に部分的な報告がある。このグループの活動の詳細な記録については Paul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, Harvard Divinity School, Cambridge, Massachusetts, box 377 を参照のこと。以下の記述はそれに基づく。

³⁵ Paul Tillich Papers, in Andover-Harvard Theological Library, file004, 1471, box5.

付記

この研究は科研費（研究課題番号：26370071）の助成を受けたものである。